

# *The Japan Evangelist* と日清戦争

—ヘンリー・ルーミスの戦争協力を中心として—

李 省 展

## *The Japan Evangelist* and Sino-Japanese War: Henry Loomis' War Cooperation

Sungjeon Lee

### 要 旨

『ジャパン・エヴァンジェリスト』は、20を超える教派・団体よりなる超教派の英文誌である。国内外の英語を解する人々に広く読まれたキリスト教誌であった。日清戦争が勃発すると、戦争に関する論議が紙面で活性化する。この時期の日本は不平等条約を改正し、一等国入りを目指すうえでも、また戦費調達のためにも欧米の支持が不可欠であったが、旅順における日本軍による虐殺という厄介な事件が生じた。広島に置かれた大本營の児島源太郎中将から在日宣教師・米国聖書協会主事のヘンリー・ルーミスに日本の擁護を要請する。ルーミスはこの児玉の要請を受け入れ、日本擁護の論陣を展開した。

ルーミスは文禄慶長の役（豊臣秀吉の朝鮮侵略）と対比して日清戦争は文明的な戦争であるとした。清の旧式な統治と対置して、日本のプレゼンスを背景とした甲午改革を近代的な改革として高く評価するとともに、日清戦争を高貴な目的をもった戦争であるとした。そして日本を文明国の一員としてふさわしい地位が与えられるべきであると一等国入りを後押ししたのである。さらに旅順における虐殺に対しては、児玉の虐殺は限定的であったという説明を十分な検証をせず受け入れ、自身の南北戦争時の経験から戦争においては起こりえるものとして虐殺を合理化した。

当時の本多庸一、植村正久、井深梶之介などキリスト教主流派は、「清韓基督教徒同志会」を結成し戦争協力を奔走したが、宣教師も一体となったこのようなプロテスタント主流派の戦争協力の在り方は、近代日本のキリスト

教戦争協力の原型であるといえよう。

キーワード：ヘンリー・ルーミス、日清戦争、戦争協力、不平等条約改正、旅順虐殺事件

Key words : Henry Loomis, Sino-Japanese War, War cooperation, Unequal treaty revision, Port Arthur massacre

## はじめに

*The Japan Evangelist* (以下ジャパン・エヴァンジェリスト) は1893年に創刊され、1925年まで出版された、超教派のミッション英文誌である。94年の段階では20を超える教派が参加し、「日本における神の働きに対する愛において、またこの地におけるキリストの為になされる働きを知りたいという情熱において我々は皆一致している」<sup>1</sup>と唱っている。記事の内容は、宣教関連事項、政治状況や人物の紹介など多岐にわたっている。執筆者には日本人も含まれており、この英文誌はその超教派的性格からすれば、キリスト教界においては在日宣教師や日本人キリスト者のみならず、国境を越えた多くの英語を解する人々に読まれていたものと推察される。本稿では主に日清戦争に関する報道や論考に焦点を当てて、それらを考察の対象とする。それとともに、日朝の聖書翻訳事業に多大な影響力を有し、また指路教会の初代牧師であり宣教師でもあった、米国聖書協会日本支局のヘンリー・ルーミス (Henry Loomis) 執筆の記事を中心として、彼の日清戦争観を明らかにしていきたい。

### 1 ジャパン・エヴァンジェリストにおける日清戦争報道

ジャパン・エヴァンジェリストの創刊は1893年であるが、翌年の7月には日清戦争が勃発している。このことから94年、95年の戦時下の記事には日清戦争に関連のものがかなりの数見られる。94年10月号のコラムでは、日清戦争勃発後、日本の新聞・雑誌が英文で論考を掲載し始めたことを伝えており、日本の戦争遂行の目的が「朝鮮の独立」にあることを強調し、報道の隅々まで愛国精神に溢れており、日本が文明と野蛮の闘いにおいて全人類の友であろうとしていると、日本の報道を紹介しているのが注目される。

数ある日清戦争報道の冒頭には *The Japan Daily Mail* から二つの論考を転

載している。その一つが、ジャーナリストとしての生涯を日本で終えたフランシス・ブリンクリイ (Francis Brinkley) の日清戦争関連記事、'The Korean Imbroglio' (朝鮮紛争)<sup>2</sup>であり、もう一つが、内村鑑三の義戦論として有名な「日清戦争の義」の英語版であった 'Justification for the Korean War'<sup>3</sup> である。この両者の記事がその表題を朝鮮紛争・戦争としているのは、当時の状況を的確に反映しているものと考えられる。なぜならば日清戦争は清と日本の朝鮮を巡る覇権争奪戦争であり、開戦当初の戦争は朝鮮半島を中心に展開されたからである。

内村鑑三の義戦論に関しては、先行研究として多く存在するが、注目される研究として吉駒明子が2016年に明治学院大学キリスト教研究所の紀要に掲載した「日清戦争義戦論とその変容」<sup>4</sup>を挙げておきたい。それに比べて、ブリンクリイの日清戦争論に関してはいまだに言及が乏しい。この長文の記事は彼が、ジャーナリストでまた英国公使館付きであったことから、1876年の日朝修好条規締結から戦争に至るまでの日中間の外交の歴史的背景と開戦直前までの状況を伝えており、情報が詳細で、非常に興味深い論考であるのは確かであるが、このブリンクリイの紹介については今後の課題とする。

## 2 ルーミスと朝鮮宣教

ルーミスは日韓のキリスト教関係史研究においては、朝鮮語への聖書翻訳事業で著名な人物である<sup>5</sup>。朝鮮における初期聖書翻訳事業には、その流れとして、中国ルートと日本ルートさらに現地における翻訳作業があるが、ルーミスは、日本のみならず朝鮮における翻訳事業にも関係している。米国聖書協会が朝鮮宣教初期には日本と朝鮮の両方を管轄していたことからルーミスの果たす役割は大きかったといえよう。実際ルーミスは特に李樹廷<sup>6</sup>に注目し、李の動向を詳しく米国聖書協会本部のギルマン (Daniel C. Gilman) に伝えている。ルーミスは李樹廷の聖書翻訳作業と朝鮮への宣教師招致運動に深いかわりを持った。実際にルーミスは「この紳士と出会ったのは私の特権であり、私たちが待望していたことがより一層実現に近づいた。彼の過去と未来の有用性を考えるならば、近代宣教史上、もっとも刮目すべき事件である。とても素晴らしい。信じられないほどである」<sup>7</sup>と述べており、李樹廷に聖書翻訳を提案したのもルーミスであった。

本稿のテーマと関連する当時のルーミスの言説で注目されるのは、ルーミ

スが中国経由の英国聖書協会やスコットランド聖書協会の影響力を極力排除しようとした点である。当時の政治状況に対する見解としてルーミスは大院君が清に拉致されたことから朝鮮においては、反日感情が多少なりとも存在するが、反清感情が極度に高まっており、これを契機に米国聖書協会の主導で朝鮮への宣教作業がなされなければならないと主張している<sup>8</sup>。実際、アメリカ人宣教師のアンダーウッド (H. G. Underwood、北長老派) とアペンゼラー (H. G. Appenzeller、メソジスト) が1885年に派遣されたのちの朝鮮宣教はアメリカの影響を濃厚に受けて展開されることとなる<sup>9</sup>。その際に、アンダーウッドとアペンゼラーは李樹廷の翻訳した聖書を携えて朝鮮にわたったのである。

### 3 ルーミスと日清戦争

ルーミスが李樹廷と出会った11年後に日清戦争が勃発することになる。1876年の日朝修好条規により清の宗主権を否定した日本は、その後も朝鮮王国は清との宗属関係を維持したことから、日本と清との間で朝鮮外交を巡って様々な対立が顕在化することとなった。日本の明治維新をモデルに朝鮮の改革を目指した金玉均は甲申政変 (1884年) を企てた。朝鮮最初の近代的改革とも称されるそのクーデターは文字通りの三日天下に終わらざるを得なかった。清の介入、宮廷の巻き返しなどにより挫折を被ることとなり、その結果彼は、日本への亡命を余儀なくされた。日本では流浪の生活を送っていた金玉均は、上海に渡航し巻き返しを図ろうとしたが、1894年3月に朝鮮から派遣された刺客によりかの地で暗殺されたのである。その後、清国内で起こったこの事件に対し、清は暗殺者を処罰せず、朝鮮へ送致したことから、日本の世論は対清感情を極度に悪化させることとなる。これらの一連の事柄が反外勢・反封建を標榜する東学の決起に端を発した甲午農民戦争への契機ともなり、朝鮮政府と日本、清の東学鎮圧をめぐり、対立が深化した。その後、景福宮を日本軍が征圧するなど、日本は朝鮮への軍事介入を深めていき、いわゆる日清戦争へと発展していくこととなる。

この時期におけるジャパン・エヴァンジェリストにおけるルーミス執筆の最初の記事は、94年12月に発行された 'The Status of Japan among the Nations and her position in regard to Korea'<sup>10</sup> である。この記事は、もとは9月28日付でルーミスが執筆したものである。以下にその内容を検証し、ルーミスの日

清戦争観を明らかにしていきたい。

ルーミスは、日本は明治維新以来、文明化され啓蒙された国家としての地位を西洋諸国に認めさせようと努力してきたが、キリスト教諸国によりその願いはことごとく否定され続けてきたと述べる。しかし日英通商航海条約締結（1894年7月）により、状況は変化するであろうと記した上で、日本はより高い地位を目指しているが、それは理由なきことではないとし、国内における物質面での改良に加え、現在進行中の清王朝との戦闘において陸海軍の力を発揮しているとしている。

ルーミスの論議で特に注目されるべきは、文禄・慶長の役（豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争、「壬申倭乱」）と日清戦争との対比である。すなわち、300年前の日本の朝鮮侵略は、正義により遂行されたものではなく、残忍極まるものであったとし、その根拠として3600の犠牲者をだした戦闘から彼らの耳を持ち帰り、残虐と血なまぐさい戦争の戦利品として展示した（後の耳塚と関係）ことを挙げている。ルーミスは文禄・慶長の役と日清戦争を対照的に捉え、日清戦争を日本の立場から擁護し正当化する論議を展開するのであった<sup>11</sup>。

ルーミスは朝鮮を悲しくも希望を失った可哀そうな、極度の貧困にあえぐ国として描き、それは清の朝鮮に対する政策の結果であるとする。すなわち朝鮮政府の改革は清によってことごとく妨げられ、高宗の暗殺計画さえ存在したことを彼はほのめかす。清は朝鮮から金銭を巻き上げ、国家財政を破綻の極みに導いたとした。朝鮮南部での反乱（甲午農民戦争）に対して朝鮮政府は清に派兵を要請したが、ルーミスはこれを1885年の条約違反（天津条約）とし、この件をもって日本の戦争介入の一因となったと日本の派兵を合理化している。朝鮮の自治と朝鮮に対して日本が成功裏に歩んできた同様の道に進むべきだと要求する時が到来した、このために日本は必要とされるどのような犠牲もいとわないと述べている。

多くの人が、朝鮮の独立の保全と朝鮮の改良が日本の朝鮮派兵の唯一の動機とは言えない、この戦争は征服のために遂行されているものと信じていると指摘するのであるが、ルーミスはこのような見解を否定する。喜ばしいことに、日本の朝鮮の独立を保全するという試みは、朝鮮の民衆の正当な権利を保全するという明らかに誠実な試みであり、この努力を無駄にしないために、人民の最善の利益の為に働く有能で誠実な朝鮮の官僚たちを守るための努力がなされているとしている。その努力の一例として、ルーミスはその時

点までなされた日本のプレゼンスを背景とした甲午改革に対して積極的な評価を与えるのである。

日本当局により国王が捕らわれの身となったというのは真実ではないとし、国王自身が宮殿と随員を守るよう日本に要請したのであるとしている(日本軍による景福宮占領に対するルーミス見解)<sup>12</sup>。ルーミスは日本の軍事的圧力のもと人民の利益になるとする朝鮮政府による諸改革を戦争正当化の理由として挙げる。それらは、旧式の制度から近代的方式による統治への転換であると高く評価し、甲午改革で示された以下の諸改革をその実例として挙げている。それらは適材適所による人材登用、早婚の廃止、罪人連座法の廃止、人身売買の禁止、役人登用人数と給与の決定、日本と同様な一般教育制度の確立、信教の自由を阻害するあらゆる法律の廃止などである。また、警察制度がソウルに導入され、銀貨の鑄造が始まったというニュースも挙げている。

さらにルーミスは日本の軍人の自制のきいた精神と規律が、敵をも味方にし、賞賛を勝ち得ていると日本の軍事行動を高く評価する。人民の利害を損なう不都合な行動は厳しく罰せられているという報告がいたるところから届いていると述べた上で、日本はあらゆることに対価を払う、水を運ぶことにさえという地方の民の言葉を紹介している<sup>13</sup>。また、日本の陸軍には物資配給所と近代的な医療部門が存在し、置き去りにされた負傷清兵をも治療しているとし、捕虜も文明化されたキリスト教国と同様に扱われていると述べている。

これらのことを踏まえて、ルーミスは日本の一等国入りを後押しするかのよう、以下のように結論付けている。

日本が進歩の敵、保守の権化である敵との衝突において、高貴な目的により動機づけられているのは議論の余地がないほど明白な事実である。日本が求めているのは人類と文明の利益である。それゆえに他の国々、キリスト教諸国により日本は尊敬を受け、信頼され、同情されるに値するのではなかろうか。そして地上における文明化され啓蒙された政府の一員としての地位を与えられてしかるべきではなかろうか。

#### 4 ルーミスと日本軍による旅順虐殺事件

日清戦争のさなかにルーミスが賞賛した日本軍の軍紀に関わる大事件が生じた。それが旅順における軍による民間人虐殺事件である<sup>14</sup>。この事件は欧米のジャーナリズムで厳しく批判された。旅順虐殺事件に関してルーミスは‘Is the assertion that the Japanese are Barbarians truthful and just?’<sup>15</sup> という記事を掲載し、そこで欧米ジャーナリズムに関する反論を展開している。ルーミスは旅順における一つの行動が日本陸軍にステイグマをもたらしたと述べ、戦史を注意深く読み、日本軍の行動を詳しく観察したならば、海外のセンセーショナルな新聞報道で作られたイメージは間違っており、正しくないと確信するに至ったとしたうえで、大本營の兒玉源太郎よりのルーミス宛ての書簡<sup>16</sup>を紹介している。

兒玉書簡では、旅順占領の4日間について言及しており、一般的に軍の敵愾心が4日間継続することはないと述べられており、旅順港は海辺のごく狭い地域で、野外での戦闘と違い、清軍が撤退する余地がなく、したがって死傷者の数は必然的に増加すると指摘している。旅順港という狭い地域では敵兵の死体が山積みになっていた。本来ならすぐに片付けられるべきであるが日本軍は金州の戦闘に対処しなければならず、死体を移動する暇がなかった。そこに見物にやってきた記者たちが旅順に引き付けられ、最も有名な場所を見ようと急いで群がったのである。二日目にやってきたものは残酷な状態を確認しそれをその日の残虐な行いと勘違いし、その状況が、三日目、四日目と続いたのであると記している。このことが四日間継続して虐殺行為が行われたと誤解された原因であるとしている。

兒玉書簡には子供や女性の殺害に関する記録はない。また殺害が一日で終了したわけでもないのだが、ルーミスはこの兒玉書簡を偏見のない高官たちの目撃証言に基づいたものと評価し、海外報道は誇張され、決定的に間違った印象を与えているという日本政府側の意図に明らかに同調する見解を示した。

ルーミス自身は南北戦争に北軍として参戦し、陸軍大尉としての軍歴を持っており、実際南北戦争での負傷の後遺症に死ぬまで苦しんだといわれている。このことから、自身の戦場での経験をも踏まえて、兒玉の要請を受け入れ旅順虐殺事件の合理化を企図したのである。

ルーミスは「旅順港という限定された区域で非常に多くの中国人に対する銃殺が例をみないほどの野蛮な行為であり、そのことが国民性を判断し、世界から非難を受ける事柄であるのであろうか」という疑問を呈する。日本軍は友軍の凌辱や、生首が木に吊るされている恐ろしい光景を目撃しており、これらの蛮行が復讐心を抱かせたのであると記し、「戦争の歴史において最も有利な状況においてさえ、正当化しようのない、後悔の種となるような一瞬の行為や戦術が常に存在する」とし、その例としてインドのセポイを挙げ、さらに自身が1863年12月に目撃したバージニアのフレデリクスバーグでの数千の無防備な人々に対する虐殺行為、チャールストンでの虐殺を挙げる。それにも拘らず、それらは戦争において起こる通常の事件の一つとして見做されていると主張する。

ルーミスは捕虜収容所に自ら足を運んだ経験から、日本に連行されている捕虜の扱いがいかなる国でもなし得ないほどに思いやりがあり、寛大であるかということ、事例を挙げ説明したうえで、以下のように結論している。

私は如何なる人間の正当化しえない殺害を弁明する意図は毛頭ない。しかし私は次のことには強烈な表現を用いて反駁する。最高の称賛に値する宿敵に対する素晴らしい寛容と慈悲を示す国民に対する正当とはとても認められない、人を傷つけて平然としているような差別に対しては。

衝突に際しては敵側にも恐ろしい残虐行為があったといわれており、そのことは確かな真実である。日本の兵士はとても慎み深く、たとえ一瞬報復の方向へ舵を切ったとしても、彼らの自制心に関してはこれまで決して揺るぐことなく、偉大であったのである。

以上、ルーミスの日清戦争に関わる言説からその戦争観を明らかにした上でいくつかの問題点を指摘して本論考を閉じたい。

#### おわりに

ジャパン・エヴァンジェリストには、ルーミスを始めとして日清戦争を日本の立場から合理化・正当化する記事に溢れている。この当時の日本はまた不平等条約改正を目指し、官民一体となって日本の文明化と一等国入りを目指し邁進していた時期であった。したがって戦時においても日本は「文明」



を体現した振る舞いが要請されていたといえよう。ルーミスの記事でもこの戦争は文明と野蛮の闘いであるとされ、文明化に必死に取り組む日本の姿と、保守主義の権化としての清が対比的に描かれている。実際ルーミスも指摘するように、日本の軍紀に関しては西欧諸国から称賛を受けていたという事実もある。しかし日清戦争期に生じた旅順における日本軍の虐殺行為は、94年7月16日の日英通商航海条約締結により日本の一等国入りが見通せてきた時期であることもあり、一等国入りを根底から覆しかねない大事件であった。この虐殺事件の発生が日本政府を慌てふためかせたことに間違いはない。

したがって大本営から直接ルーミス宛てに書簡が届いたのも、日本政府の対マスコミ政策の一環であったと考えられる。アメリカとの深いつながりを有し、日本のみならず朝鮮の情報に通じた欧米からの信用を勝ち得ている宣教師を日本側に取り込むことは必須の課題であったといえる。ルーミスは宣教師の中でも戦争勃発当初から親日的で、宣教師間でもまた重鎮であることから、児玉源太郎から直接ルーミス宛てに書簡が送られてきたものと推察される。戦時で情報の取得が困難という状況は存在したであろうが、ルーミスはこの大本営からの書簡の主張を十分な検証もなく受け入れ、それをもとに、マスコミ報道が誇張された虚偽であると判断した。そればかりか、南北戦争における自身の経験をもとにアメリカにおける同様な虐殺事件を論じ、それはよく起こりえる戦争の一コマに過ぎないとする、いわば虐殺事件の過小評価が行われたといえよう。ルーミスは日本の軍紀のすばらしさを捕虜の待遇などを挙げながら強調しているが、これはあたかも日本の一等国入りを後押しするような論議である。他方で、アメリカでのルーミス自身の経験を踏まえた論議は、南北戦争の影が濃く残る当時のアメリカにおいて説得力をもちえたのではなかろうか。なぜならばアメリカ人にとっては自らの歴史を踏まえた上で旅順虐殺事件を相対化する可能性が提起されたからである<sup>17</sup>。

ジャパン・エヴァンジェリストはまたルーミス主導で米国聖書協会を通じ前線の兵士に聖書が配布されたという事実を明らかにしている。ルーミス宛ての聖書配布に対する感謝の念を表す手紙が寄せられており、それらが翻訳され掲載されている<sup>18</sup>。

日本のキリスト教は維新後の最初の大規模な対外戦争であった日清戦争当初から深く戦争と関わっていた。内村鑑三は「義戦論」を世に問うたし、本

多庸一、植村正久、井深梶之介、宮川経輝などのキリスト教主流派は「清韓事件基督教徒同志会」を結成している。本多庸一は自ら前線まで赴き兵士を慰問した。このようにキリスト教主流派と宣教師が一体となって戦争協力を励んだ実態が浮き彫りにされるのである<sup>19</sup>。このようなキリスト教の戦争協力は日清戦争のみならず日露戦争にも受け継がれていく<sup>20</sup>。日清戦争時の戦争協力は近代日本におけるキリスト教戦争協力の原型であるといえるのではなかろうか。

### Endnotes

- 1 *The Japan Evangelist*, Vol. II – No. 1, Oct. 1894, 60.
- 2 *Ibid.*, 1–8.
- 3 *Ibid.*, 8–13. 内村鑑三が「朝鮮戦争」(Korean War)と称しているのが、注目される。「日清戦争」という呼称は、戦争後に定着化した歴史用語であることを指摘しておく。
- 4 吉馴明子「日清戦争義戦論とその変容」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』48巻、2016年2月、309–335頁。
- 5 ヘンリー・ルーミスに関する先行研究として以下の4点を挙げておく。
  - ・ヘンリー・ルーミス『宣教師ルーミスと明治日本—横浜からの手紙』(岡部一興・有地美子訳)、有隣新書、2000年。
  - ・金成恩『宣教と翻訳—漢字圏・キリスト教・日韓の近代』2013年8月。韓国語による研究は以下の李萬烈による研究がある。本論考の主な聖書翻訳に関する論述はこの書を参考に行っている。
  - ・金成恩「在日宣教師ルーミス書簡における日本観—日清戦争を中心に」『日本研究』第14巻、高麗大学校グローバル日本研究院、2010年、273–288頁。
  - ・이만열 《대한성서공회사 I. 조직·성장과 수난》 대한성서공회, 1993.
- 6 李樹廷は東京外国語大学の前身である、東京外国語学校で朝鮮語を教えた。聖書翻訳に尽力し、1885年には『新約馬可伝福音書諺解』がアメリカ聖書協会から出版された。ルーミスと協同し、宣教師の朝鮮への派遣を要請し、これに応じて、アメリカ北長老派のアンダーウッドとメソジストのアペンゼラーが朝鮮に1885年に赴任した。また李樹廷は在日大韓基督教会の創設者とされている。
- 7 H. Loomis to Dr. Gilman, May 30<sup>th</sup>, 1883.
- 8 이만열, 142.

- 9 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』社会評論社、2006年参照。
- 10 *The Japan Evangelist*, Vol. II - No. 2, December 1984, 60-64.
- 11 旅順における日本軍の虐殺事件以降のアメリカのワールド新聞において、「条約改正」反対の文脈で、秀吉の耳塚を用いて、日本の「野蛮」を強調する論議があった。大谷正「ワールド新聞と日清戦争報道—『旅順虐殺事件の一考察』補遺（二）—」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第23号、1989年3月、165頁。これに対してルーミスは、近代日本は「野蛮」とは無縁であることを強調した論議を展開している。
- 12 この景福宮占領事件は日清戦争開戦直前の7月23日になされたもので、事前に日本が周到に計画し、自らが意図的に引き起こした事件であることが1994年に福島県立図書館所収の佐藤文庫から発見された資料により明らかとなっている。中塚明『歴史の偽造をただす、戦史から消された日本軍の「朝鮮王宮占領」』高文研、1997年。
- 13 日本軍の軍紀に関しては一等国「東洋の君子国」と称されるためにとられた方策であった。しかし朝鮮においては食料の略奪行為など、また軍票により約束された対価の不履行などの影の部分が存在している。
- 14 田中利幸編『戦争犯罪の構造—日本軍はなぜ民間人を殺害したのか』大月書店、2007年参照。  
日清戦争期の戦死者数でいえば、日本人、清国人よりも朝鮮人の方が多かったといわれる。この時期の日本軍による東学農民軍への弾圧は過酷を極めた。また台湾領有後の台湾北部における台湾抗日義勇軍への凄惨な弾圧では多くの民間人の犠牲者を生み出している（同書、42、43頁、28-30頁）。19世紀末の日本軍による虐殺は、国家・地域を超えた広がりをもって把握されるべきであろう。
- 15 *The Japan Evangelist*, Vol II - No. 4, April 1895, 226-228.
- 16 1895年2月28日付。
- 17 イギリスの *The Times* と比較してアメリカの *The New York Times* では、旅順虐殺事件における日本の残虐行為は日本批判につながらず、むしろ清軍の残虐性の被害者となった日本軍を擁護していた。中塚悠理子「日清戦争期における欧米の対日観—The Times と The New York Times を中心に—」慶應義塾大学法学部政治学科ゼミナール委員会『政治学研究』59号、2018年、401頁。
- 18 *The Japan Evangelist*, Vol. II - No. 4, April 1895, 225-226.  
5通のルーミス宛ての書簡が翻訳されて掲載されている。

- 19 キリスト教社会主義者の木下尚江は日清戦争時のキリスト者について自伝で次のように述べている。「予は戦争ということはキリスト教の反対するものだという事を毫も疑わなかった。しかるに戦争の始まると共に、東京に在る知名のキリスト教徒は全国を遊説して『正義の戦争』を鼓舞し始めた。予は重ね重ね驚いたが、これは畢竟彼らが真正にキリストの福音を会得しないのか、左なくば『非国体』の攻撃を逃れようとするための挙動であつたに相違ない」（『懺悔』1906年）。
- 20 日本政府はロシアとの情報戦において後塵を期していることを憂いて、対抗するために何らかの手段を講じなければならなかった。それは戦費を外国公債に求めていたことから必須の課題であった。桂太郎総理大臣は明治学院のインブリー宣教師と会談し、日本政府の立場を明らかにし、その英訳をインブリーに託している。原稿は英国の『スペクテーター』に送られ、欧米の様々な新聞に転載された。また明治学院総理の井深樞之介は桂総理の協力要請のもとパリにおいて開催された第6回万国学生基督教青年会同盟大会を始めとして欧米各地において「日露戦争の目的とその結果の予想」をテーマとした演説を行っている。（『明治学院百年史』1977年、255-260頁。）

本稿では、キリスト教プロテスタント主流派に焦点を絞り戦争協力を論じたが、非主流派（少数派）による平和運動も存在することは付記したい。すでに日清戦争時には基督友会（クエーカー）の影響により、日本平和会が結成（1889年）されており、北村透谷、加藤万治などが雑誌『平和』（1892-93年）において反戦の論陣を張っている。また日露戦争時には、内村鑑三は、日清戦争は朝鮮の独立を大義として戦われたとされたが、独立がかえって危うくなったこと、日清戦争による日本の荒廃などから「義戦論」から「絶対非戦論」に転じた（内村鑑三「余が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』56号、1904年9月22日）。

付記 本研究は下記の研究助成を受けてなされた。

日本学術振興会 科研 課題番号 18K00086、課題番号 23K00076。